

B. V. Bratus. The Formation and Expressive Use of Diminutives (Studies in the Modern Russian Language 6). Cambridge University Press, 1969. viii + 70 pp.

栗 原 成 郎

この渺たる小冊を書評の対象に取り上げたのは、その学習文献としての重要性の故にほかならないが、とくに、本書は特殊な存在価値を次の二点においてもつ、と思われる。第一に、ロシア語における指小形の形成と用法を扱ったモノグラフィーは従来きわめて少なく、一般に広く読まれ得る形を備えた文献としては本書が殆ど唯一のものであること。第二に、ロシア語の指小形の用法は、その感情表現の微妙さの故に、外国人学習者にとって修得が困難であるが、本書においてはロシア人研究者とイギリス人研究者との協力によって、ロシア語の指小形の語感を英語国民に理解させるための対照語学的な工夫が試みられていること。

本書はケムブリッジ大学出版部から刊行されている「現代ロシア語研究」シリーズ《*Studies in the Modern Russian Language*》の6番目のモノグラフィー（第4分冊）⁽¹⁾であるが、著者がロシア人である点で、他の論文と異なっている。著者 Bratus は1964～65年の一年間、エディンバラ大学のロシア学科の交換プログラムの職務にあり、この間、彼はかねて関心を寄せていた指小形の問題につき、D. Ward 教授より論文執筆を勧められ、ロシア語で稿を草した。これを D. Guild が翻訳し、D. Ward が編集した。

さまざまな指小接尾辞による指小語形の生産的な形成は、ロシア語の形態上の特質のひとつであり、この言語の豊かな表現財の一端にもなっている。いわゆる「主観的評価の指小接尾辞」《суффиксы субъективной оценки》⁽²⁾は、とくに名詞において、同一の語からさまざまな表現力の段階をもつ指小形を形成し、そこに感情的評価のカテゴリーを構成する。指小形は場面・文脈に依存して、主題に対する話者の気分・情緒的態度を表現する機能をもつ。このような指小形の使用が外国人学習者にとって困難であることは、言うまでもない。

英国におけるロシア語研究の草分けのひとりである Nevill Forbes は名著

《Russian Grammar》(1914年初版)において、この問題につき、次のように書いている。⁽³⁾

多くの場合、指小形は、実際、小さいことを意味するために用いられるが、単に、愛情、丁寧、機嫌のよさを表わすための手段として用いられるにすぎないことがきわめてしばしばあり、こういうとき、それらを英語に翻訳することは、不可能ではないにしても、困難である。たとえば、給仕は、ふつう、皿やスプーンのことを、それらの大きさに関係なく、тарелочки, ложечки と言う。また車掌は列車のなかで乗客に切符の提示を求めるとき、билетики (little tickets) と言う。これは切符が小さいことを意味するのではなく、車掌の愛想のよさ (good humour) を表わし、彼に一杯をすすめればそれを辞さないであろう、ということを表わしているにすぎない。

Forbes はウィットに富んだ学者で、そのいくつかの著作においてしばしばこのような表現を好んで用いているが、ここに引用した最後の一文《he would not refuse a drink if you offered him one》の内容に関しては疑問がないわけではない。博学な語学通であるアメリカの評論家 Edmund Wilson は《My fifty years with dictionaries and grammars》と題するエッセイのなかで、この点に関して、興味あることがらを述べている。あるとき Wilson が、ひとりのロシア人の友人に、車掌の билетики の用法について Forbes の説明を読んできかせたところ、その友人は異議を唱えたという。《私の友人の論点は、車掌が切符を билетики と言ったのはほんとうは敬意 (deference) の表現であって、気やすさ (familiarity) の表現ではないのだ、ということであった、と思う》と Wilson は書いている。⁽⁴⁾

同じ指小形であっても、場面・文脈によってその表わす感情にニュアンスの差違が生ずる。Bratus も、たまたま、この билетик のニュアンスに言及している（本書の巻末の bibliography には Forbes の文法は挙げられていないから、彼を意識したわけではないであろう）。《Купите билетик! というときの билетик という形は小さな切符を意味するのではなく、‘Be so kind as to buy…’ という気持を表わす感情のニュアンスをもつ》(p. 18)。

本書は、指小形の形成法とその表現機能を扱い、指小形の表現力の度合に応じて指小接尾辞を三段階に分類し、指小形の使用領域を限定した点に、特徴がある。指小形をもつ品詞は名詞、形容詞、副詞であるが、動詞においても指小表現の可能性を見出そうと試みている点にも、本書の特徴が見られる。

名詞の指小形を形成する接尾辞は30種以上、形容詞のそれは約10種ある。し

かし指小形の意味の分析のむずかしさは、このような指小接尾辞の数の多さにあるというよりは、同一の接尾辞が、派生源の語の語彙的意味や場面・文脈やイントネーションによって、意味のさまざまな陰影——肯定的ないし否定的——をもつという事実にある。指小接尾辞には愛情・優しさなど肯定的な感情を表わすものが多く、軽蔑などの否定的な感情評価を表わすものは少ない。

Bratus はロシア語の名詞の指小形に、第一（最小）、第二（中間）、第三（最大）の三段階の表現力の度合いを区別する（この分類は Unbegaun のそれに近い）。A. 第一段階。-ка, -ик, -чик, -ок/-ёк, -(е)цо/-(и)це, -ец, -ёнок/-онок, -ёныш, -ица, -инка, -ыш, -ко, -ико, -ца の接尾辞から形成される。感情の表現力は最も小さいが、場面・文脈によって意味のさまざまな陰影が顕わになる。外国人にとって最も習得しにくい指小形である。B. 第二段階。-онька/-енька, -уша/-юша, -ушка, -онка/-ёнка, -ишка, -ишко/-ышко, -ашка の接尾辞から形成される。hypocoristic（愛称的）なニュアンスが優勢であるが、まれには軽い軽蔑や気やすさの意味をもつこともある。C. 第三段階。-очка/-ечка, -ичка, -очек/-ёчек, -оночек/-ёночек, -оночка/-ёночка, -иночка, -ишечка, -ишечко, -ушечка/-юшечка, -урочка, -уленька の複合的（二重／三重）指小接尾辞から形成され、肯定的感情（愛・喜び・優しさ）を最も強く表現する。

指小形の形成法についてはアカデミア文法に比較的詳細な記述があるが、本書における記述は、巻末の付録（音韻交替・アクセント移動の整理）と合わせて、一層精密である。アカデミア文法には見られない、指小形の意味とスタイルの記述が試みられていることも本書の利用価値を高めている。

しかし疑問点もいくつかある。

1. 接尾辞 -ка をもつ指小形のアクセントの位置について (p. 14)。アクセントは語根音節にあるが、これを二つに分け、(a)元の語が複数生格において出沒母音をもつとき、それは指小形にも現われ、指小形のアクセントは複数生格のそれに従う (ви́шня—ви́шен—зи́шенка, земл́я—земéль—земéлька, се́мья—семéй—семéйка) と(b) when the original word has a structure exemplified by such words головá, бородá, пеленá, берёза the diminutive has the stress on the syllable before -ка (голов́ка, борóдка, пелён́ка, берёзка) としている。(a)の説明はよいが、(b)のそれは曖昧で、十分にルール化されていない。これは、元の語のアクセントが語末音節にないときは、指小形も元の語と同じ位置にアクセントをもつ (корóва—корóвка, мину́та—мину́тка) が、

元の語のアクセントが語末音節にあるときは、指小形のアクセントは接尾辞の直前の音節にくる (голова—голова́, сторона́—сторо́нка, трава́—травка) というような細別を設けないと, structure exemplified by such words の意味が明確にならないであろう。

2. 動物の子を表わす接尾辞 -ёнок/-онок および -ёныш は, 客観的な意味のカテゴリーであり, 形態的にも別種である (-ёнок/онок は複数で -ят- になる) から, 主観的・感情的価値判断のカテゴリーに加えるべきではない, とされる (p. 27)。

3. 形容詞の接尾辞 -оватый/-еватый を感情的評価のカテゴリーに入れる理由を, Bratus は名詞の指小形との結びつき (холодновата́я пого́дка 'coldish weather', плоховата́я пье́ска 'poorish play') に求めているが, 理由としては積極性を欠く。このような指小形を含む統語的結合は今後の課題として検討を要するであろう。

Bratus によると, 使用頻度の最も高い 25,000 語のうち, 1,000 語以上の名詞, 形容詞が指小形をもつという。本書巻末の付録には約 320 語の名詞の日常語彙から形成される指小形のリストがあり, これは大いに活用すべきであろう。

指小形という情緒的な表現は元来民衆の口語に根ざすものである。ラジオ, テレビなどの今日のマスメディアが口語のもつこのような情緒的・感情表現的ニュアンスを増大しているが, 一方, 現代ロシア文語においても指小形の使用が一層拡大している傾向があることを, 本書は例証資料より示している。

《ロシア語の口語を修得し, またロシア文学を, 情緒的・感情表現的余韻の深い理解をもって, 読解しようと思う学習者は, 指小形の研究に特別の注意を払わねばならない》と著者は結論する (p. 56)。

評者の主観では кни́жечка である。

注(1) Studies in the Modern Russian Language, 1 + 2, 3, 4 + 5 をひとまとめでした書評 (Helena Křížkova 評) が IJSLP (International Journal of Slavic Linguistics and Poetics) XII, 1969, pp. 187-191 にある。

(2) В.В. Виноградов. Русский язык (Грамматическое учение о слове). М.-Л., 1947, стр. 112-115 参照。

(3) N. Forbes. Russian Grammar. 3rd ed. (Revised and enlarged by J.C. Dumbreck), Oxford, 1964, p. 83.

(4) E. Wilson. The Bit between My Teeth. A Literary Chronicle of 1950-1965, London, 1965, pp. 617-618.